

週末型ホームステイの実施とその問題点

岡 益巳

1. 序

留学生教育の一環として、留学生と地域社会との交流促進を図ることは非常に重要なことである。事実、1999年以降毎年、雑誌『留学交流』には「留学生と地域交流」にかかわる特集が組まれている¹⁾。留学生と地域交流を考える場合、地域の祭りなどの伝統行事に加えて、バザー、料理交流会、講演会、シンポジウム、学校訪問、日本語弁論大会など様々なタイプの交流が考えられるが、ホームステイもその中の1つである。

筆者は2000年4月以降留学生センターで留学生の相談指導に専念している²⁾。着任当初、複数の日本語研修生からホームステイを体験したいとの要望が出されたが、当時留学生センターのホームステイ実施体制作りは全く手つかずの状態であり、ホストファミリーを確保するための情報収集から始めなければならなかった。

2001年3月21日、NGO「ハンドインハンド岡山」の大野三枝子氏の協力を得て、留学生支援ネットワーク設立を目的とした第1回準備会議の開催にこぎつけた。県内NGO3団体から4人、岡山大学留学生ボランティア・WAWAの責任者及び筆者の合計6人が参加し、ホームステイの受け入れを中心とする留学生支援交流体制作りに関して話し合いを行なった。

同年7月18日に開催した第2回準備会議においては、事前の連絡調整を踏まえて、第1回ホームステイ実施計画の最終確認を行ない、その1週間後に日本語研修生8人を対象とする週末型のホームステイを実施した。ホームステイの受け入れは全くのボランティアであり、無料である。同年8月7日開催の第3回準備会議において、会の正式名称を「留学生支援ネットワーク・ピーチ」に決定した。2003年11月11日に開催の第21回連絡会議において、会則が制定され、今日に至るまで地道な留学生支援交流活動を続けている。

ちなみに、留学生支援ネットワーク・ピーチの目的は、会則第2条によると「岡山大学の留学生の支援のために岡山県内のNGOを組織し、岡山大学留学生センターの相談・指導部門と協力して支援活動を行うことを目的とする」と規定されている。

この小論のねらいは、2001年度以降、主として日本語研修生を対象に毎年2回実施している週末型のホームステイの実施状況を分析し、その問題点を明らかにし、今後の実施計画の改善に資することにある。2004年末までに合計8回のホームステイを実施したが、

ここでは 2004 年度前期（第 7 回ホームステイ）までを振り返り、参加留学生及びホストファミリーの双方に対する合計 3 種類の調査結果に基づいて実施内容の整理、分析を試みる。

2. ホームステイ実施概要

2.1 参加留学生の概要

第 1 回（2001 年度前期）から第 7 回（2004 年度前期）にかけて、合計 95 人の留学生がホームステイに参加した。参加留学生の出身国は 42 各国に跨り、その内訳はアジア 15 各国 55 人、中南米 10 各国 15 人、アフリカ 9 各国 11 人、ヨーロッパ 5 各国 8 人、中近東 2 各国 4 人、オセアニア 1 各国 2 人である。

参加留学生を在籍身分別にみると、日本語研修生 74 人³⁾、日韓共同理工系学部予備教育留学生（以下、日韓予備教育学生と略称する）14 人、日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生と略称する）7 人である。

表 1 ホームステイ参加留学生の出身国

| |
|--|
| アジア：アフガニスタン(1)、インドネシア(5)、韓国(15)、タイ(3)、中国(3)、パキスタン(1)、パプアニューギニア(1)、バングラデシュ(4)、フィリピン(7)、ブータン(1)、ベトナム(1)、マレーシア(3)、ミャンマー(7)、モンゴル(1)、ラオス(2) 小計 15 各国、55 人 |
| 中近東：トルコ(3)、イエメン(1) 小計 2 各国、4 人 |
| アフリカ：エジプト(3)、ガーナ(1)、ケニア(1)、コンゴ(1)、ジンバブエ(1)、スーダン(1)、タンザニア(1)、チュニジア(1)、モーリタニア(1) 小計 9 各国、11 人 |
| オセアニア：オーストラリア(2) 小計 1 各国、2 人 |
| 中南米：アルゼンチン(1)、エルサルバドル(1)、コスタリカ(1)、ジャマイカ(1)、チリ(1)、ブラジル(3)、ベネズエラ(1)、ペルー(2)、ボリビア(1)、メキシコ(3) 小計 10 各国、15 人 |
| ヨーロッパ：オーストリア(1)、スペイン(2)、フランス(1)、ポーランド(3)、ロシア(1) 小計 5 各国、8 人 |
| 合計：42 各国、95 人 |

注) () 内の数値は参加人数

表 2 実施時期別・在籍身分別ホームステイ参加留学生数

| | 第 1 回 | 第 2 回 | 第 3 回 | 第 4 回 | 第 5 回 | 第 6 回 | 第 7 回 | 合計 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 研修生 | 8 | 17 | 7 | 17 | 14 | 5 | 6 | 74 |
| 日韓生 | 0 | 5 | 0 | 5 | 0 | 4 | 0 | 14 |
| 日研生 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 3 | 0 | 7 |
| 合計 | 8 | 24 | 8 | 23 | 14 | 12 | 6 | 95 |

注 1) 年 2 回実施。2001 年度前期（第 1 回）～2004 年度前期（第 7 回）

注 2) 研修生＝日本語研修生、日韓生＝日韓予備教育学生

参加留学生を性別でみると、男性 55 人、女性 40 人である。参加留学生の年齢は 18 歳から 35 歳までの間であり、平均年齢は 27.7 歳である。在籍身分別に平均年齢をみると、日本語研修生 29.6 歳、日韓予備教育学生 19.0 歳、日研生 25.0 歳である。

日本語力についてみると、日本語研修生の場合は来日時点で既習者 8 人、未習者 66 人である。日韓予備教育学生は中級レベル、日研生は中級または上級レベルである。

2.2 ホストファミリー登録者の概要

2004 年末現在で、岡山大学留学生相談室には 54 家庭がホストファミリーとして登録されている。原則として、登録者は留学生支援ネットワーク・ピーチに加盟している団体 (=NGO) のメンバーである。登録者を所属別にみると、「倉敷国際親善協会」が圧倒的に多く 31 人、次いで「おかやま女性国際交流会」7 人、「岡山ユネスコ協会」6 人、「ハンドインハンド岡山」4 人、「アムネスティ岡山」1 人、「留学生ボランティア・WAWA」1 人、無所属 4 人である⁴⁾。第 2 回ホームステイは参加希望留学生が 24 人と多かったため、当時 20 人不足であった加盟団体会員の登録者だけではホストファミリーが確保できず、無所属の 3 人及び岡山市国際交流協議会にホストファミリーとして登録している 5 人にも同協議会を通じて引き受けを依頼した。第 3 回以降のホームステイでは、専ら留学生支援ネットワーク・ピーチ加盟団体の会員である登録者にホストファミリーを引き受けてもらっている。

2.3 ホームステイ実施要領

(1) 実施計画の立案

留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議において、実施日の 2、3 か月前に実施計画を立てる。前期は 7 月、後期は 11 月末から 12 月初めにかけての連続した 2 回の週末を実施日とし、1 泊 2 日コースと日帰りコースを設定する。受け入れの時間帯はホストファミリーの裁量にまかせるが、1 泊 2 日コースの場合は昼頃から翌日の昼頃まで、日帰りコースの場合は朝から夕方までを一応の目安とする。

(2) 留学生に対する予備調査

ホームステイ実施の 6 週間から 8 週間前に日本語研修留学生等に対して参加希望の有無をアンケートの形で実施する。参加希望と回答した留学生には、①1 泊 2 日か日帰りか、②参加希望日、③1 人で訪問するか、友人と訪問するか、④食べられないものの有無、あれば具体的に、⑤飲酒の有無、⑥喫煙の有無、⑦ペットアレルギーの有無、⑧宗教（差し支えなければ）、⑨電話・メールアドレスを記入し、提出してもらう。

初期の参加留学生から「知らない日本人の家庭を 1 人で訪問することは不安だ」という

意見が出たため、ホストファミリーは原則として留学生支援ネットワーク・ピーチに加盟している団体の会員家庭であり、安心して訪問、滞在することができると説明している。第3回ホームステイからクラスメートといっしょに1つの家庭を訪れても良いことにしたのも、1人で参加することに不安を抱く留学生の意見を取り入れた結果である。

(3)ホストファミリーの決定

留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議において、上記の参加留学生情報に加えて、氏名、性別、出身国、専攻、在籍身分など一覧表にした資料を配付する。各加盟団体の代表者は、配付資料に基づいて、それぞれの会員に対してホームステイの引き受け者を募集し、引き受け者が決まり次第筆者に連絡する。原則として、先着順で留学生とホストファミリーの組み合わせを決定する。組み合わせ決定の都度、各加盟団体の代表者に筆者からメールで連絡し、ホストファミリーに待ち合わせ日時、場所を指定してもらう。

(4)参加留学生への連絡

ホストファミリーの名前、住所、電話、メールアドレス、待ち合わせ日時と場所を参加留学生に連絡する。

(5)JR 付き添い者の決定

漢字が読めない留学生が JR 各駅でホストファミリーと待ち合わせる場合、待ち合わせ駅改札口までの付き添いが必要である。留学生ボランティア・WAWA あるいは留学生支援ネットワーク・ピーチのメンバーが付き添いを行なう。

(6)実施当日

時折、行き違いが発生するため、筆者または留学生支援ネットワーク・ピーチ事務局担当者が緊急連絡窓口となる。ホストマザーが留学生会館へ迎えに行ったところ留学生が別の行事に参加し不在であったケース、急病で急遽ホームステイをキャンセルしたケース、実施日を勘違いした留学生が迎えに来たホストマザーに帰ってもらったケースなどがある。

(7)事後処理

筆者及び留学生支援ネットワーク・ピーチ事務局の連名でホストファミリー宛の礼状を出す。その際、参加留学生の「ひと言」を添えるか、写真を添付する。また、ホストファミリー及び参加留学生の双方に対して簡単なアンケート調査を実施する。留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議において、実施報告を行なう。

(8)その他

留学生センター定例教員会議等で、参加（予定）者リストを配付し、実施計画の報告あるいは事後報告を行なう。

3. アンケート調査結果

3.1 参加留学生に対するアンケート調査結果の概要

参加留学生に対して、毎回ホームステイ終了後に簡単なアンケート調査を実施している。回収率は 100%である。従って、参加者の出身国、年齢、性別、在籍身分については、第 2 章の参加留学生の概要で示した通りである。

(1)日帰りか 1 泊か

日帰りのビジットを希望した者が 54 人、1 泊のステイを希望した者が 41 人である。

(2)ホームステイは面白かったか

①とても面白かった、②面白かった、③意見なし、④余り面白くなかった、⑤面白くなかった、の 5 段階で評価してもらった。「とても面白かった」と回答した者が 76 人 (80.0%)、「面白かった」が 17 人 (17.9%)、無回答が 2 人 (2.1%) である。

(3)食事は食べられたか

宗教上の理由あるいは信条や好き嫌いなどで食べられない物に関しては、事前にホストファミリーに伝えてあるため、全員が「はい」と回答している。

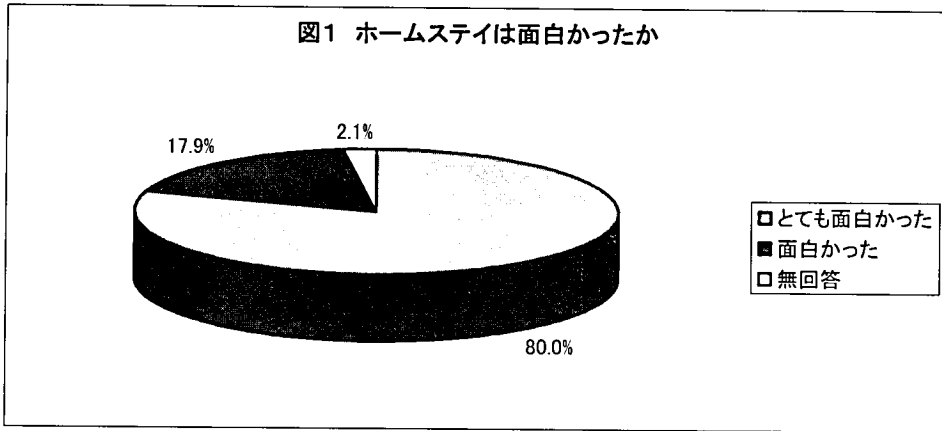
(4)どんな体験をしたか

自由記述形式でどのような体験をしたかについて回答してもらった。95 人中 94 人 (98.9%) が回答し⁵⁾、無回答はわずか 1 人 (1.1%) である。「楽しかった、素晴らしい体験をした」といった類の感想が 48 人、「ホストファミリーがとても親切だった」という類の感想が 26 人あった。具体的な体験内容を整理すると以下の通りである。

ホストファミリーといっしょに出かけた場所あるいは体験した事は、瀬戸大橋 (8 人)、寺・神社 (8 人)、美術館・博物館 (7 人)、海 (4 人)、倉敷美観地区 (3 人)、花火見物 (2 人)、岡山城 (2 人)、餅投げ見物 (2 人)、ドライブ (2 人)、小中学校 (2 人)、造船所 (2 人)、公園 (2 人)、みかん狩り (2 人)、温泉 (1 人)、ダム (1 人)、牧場 (1 人)、後樂園 (1 人)、神戸旅行 (1 人)、ホストマザーの娘の家庭 (1 人)、病院へ親族の見舞い (1 人)、このほかに、色々見物 (1 人) との記述もあった。

ホストファミリーの家でいっしょに体験したことは、団らん (14 人)、料理作り (7 人)、茶道・華道 (5 人)、子供たちとの遊び (2 人)、バーベキュー (2 人)、陶芸 (1 人)、日本の歌の習得 (1 人) などがあった。このほかに、食事がおいしかった (15 人)、日本人の生活や文化などが理解できた (10 人) といった記述もあった。

図1 ホームステイは面白かったか



3.2 ホストファミリーに対するアンケート調査結果の概要

毎回ホームステイ終了直後に郵送法により、ホストファミリーに対するアンケート調査を実施している。参加留学生 90 人分の回答があり、回収率は 94.7%であった。

(1) 留学生に対する全体的な印象

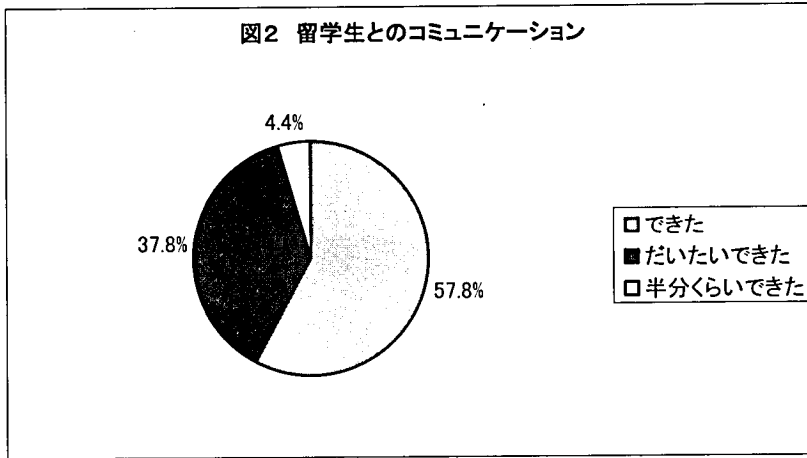
留学生の全体的な印象について、①好感がもてた、②好感がもてなかった、③どちらとも言えない」の 3 項目から選んでもらったところ、100%の回答が「好感がもてた」であった。その理由を記述式で尋ねたところ、「しっかりした考え、素直、誠実、真摯、意欲的、明るい、聡明、気さく、素朴、真面目、純粹、礼儀正しい、マナーが良い、思いやりがある、好奇心が強い、勉強熱心、将来の目的がはっきりしている、自国に誇りを持っている、子供にも明るく接してくれた、家事を手伝ってくれた。」といった回答が寄せられた。

(2) 留学生とのコミュニケーションはできたか

来日時時点で 90 人のうち 63 人 (70.0%) が日本語未習者であり、彼らはホームステイ実施時点では 2、3 か月の日本語学習歴しかないため、日本語でコミュニケーションをとることは容易ではない。

留学生とのコミュニケーションができたか、①できた、②だいたいできた、③半分くらいできた、④余りできなかった、⑤できなかった、の 5 段階で回答してもらったところ、「できた」57.8%、「だいたいできた」37.8%、「半分くらいできた」4.4%であり、9 割以上のホストファミリーが留学生と何とかコミュニケーションをとることができたと感じている。全体的な印象の自由記述欄に、「コミュニケーションをとろうと努力してくれた。」、「積極的に日本語で話そうとしてくれました。」、「英語と日本語を使いながらの会話でしたが、一生懸命話して下さいました。」、「彼の英語は非常にわかりやすく、・・・」、「日本語より英語で会話を楽しみました。」などと記されており、一部英

語を交えながら、あるいは全て英語でコミュニケーションをとったケースもあることが分かる。



(3) プレゼントを持参したか

「留学生は何かプレゼントを持ってきましたか。」という質問に対して、「はい」が76人(84.4%)、「いいえ」が14人(15.6%)あった。「いいえ」の欄外に「別にかまいません」、「これでいいと思います。」との添え書きのある回答もあった。また、「はい」の欄外に「手作りクッキー他、感激!」と添え書きされた回答もあった。

(4) 留学生とどのように過ごしたか

まず、自由記述に基づいて、典型的な受け入れ例を4つ示す。

① 泊2日の場合

例1: 1日目 14時 倉敷駅出迎え、美観地区

17時 家族、友人と共にバーベキュー大会をしながら花火見物

2日目 午前中 子供たちと家で遊ぶ、昼食

14時 車で岡山駅へ送る

例2: 1日目 11時 倉敷駅出迎え

11時30分 昼食、美観地区を散策

16時 買い物

17時 帰宅、家族と夕食、団らん

20時 温泉へ行く

21時30分 家族と団らん

23時 就寝

2日目 8時 起床、家族と朝食

9時 家族と団らん
12時 昼食
12時30分 吉備津神社と高松最上稲荷見学
17時 家族と夕食
18時30分 留学生会館へ送る

②日帰りの場合

例1：11時 留学生会館へ迎えに行く

11時20分 自宅着、自己紹介、昼食、団らん
15時30分 桃太郎温泉へ
?時 夕食、息子の友人も加わり団らん
20時 留学生会館へ送る

例2：11時 岡山駅出迎え、途中で昼食

12時40分 自宅着、団らん
15時30分 近くのショッピングセンターへ行く
16時30分 近所の「もちなげ」に参加する
18時30分 家族、友人と共に夕食、団らん
20時40分 岡山駅で別れる

次に、どのようにして受け入れ留学生と過ごしたか、「家族との食事、その準備、片づけ」と「家族との団らん」を除いて、整理してみる。出かけた先は、各種神社・仏閣(24人)、鷲羽山・王子が岳などの山(19人)、美観地区(16人)、美術館・博物館(16人)、瀬戸大橋(12人)、親族・知人宅(10人)、小中高校(5人)、下津井回船問屋(5人)、渋川海水浴場などの海(5人)、チボリ公園(4人)、後樂園(4人)、古墳・遺跡(4人)、岡山城(4人)、造船所(2人)、牧場(2人)、港の市場(2人)、発電所(2人)、姫路城(2人)、ダム(1人)、野崎邸(1人)、神戸市(1人)、教会(1人)、英会話教室(1人)である。また、留学生が体験したことには、茶道(8人)、華道(7人)、温泉(7人)、ブドウ狩り・ミカン狩りなど(5人)、瀬戸内海クルージング(1人)、テニス(1人)、アイススケート(1人)、陶芸(1人)があり、花火大会(2人)、餅投げ(2人)、朝市(1人)、剣道の試合(1人)、祭り(1人)も見物した。

(5)その他の意見

「楽しく、貴重な時間を持つことができました。」「また機会があれば、ぜひ参加させて下さい。」といった類のコメントが圧倒的に多い。今後ホームステイを実施するに当たって参考になる意見には次のようなものがある。

1)健康管理：「体調が悪いようでした。今後、ホームステイ前日に健康チェックを軽く

しておいて下さると助かります。」

2)土産の持参：「無理に高い桃など持ってこなくても良いのに。」「おみやげは日本製の時計でしたが、別におみやげはなくても話だけでよいです。」「母国の写真集をプレゼントしていただき、大変恐縮しております。日本の文化として訪問先へ土産を持参する習慣はありますが、短時間のボランティアにこのようなプレゼントは過大なお心遣いではないかと思えます。」「プレゼントは（日本のものではなく）出身国製の方がよかった。」

3)留学生情報：「（引き受け留学生に関する）情報が乏しかったのが残念でした。」
「事前にもっと情報がある方が良いかも。今回は、個人の電話番号のみでした。」

4)礼状：「帰るときありがとうと言われているので十分ですが、日本の習慣のよい点として本人からの礼状を出してはいかがでしょうか。」「留学生に礼状を書くように指導してほしい。」

5)受け入れ方針：「ホームステイ、ビジット等を引き受けられる方の中には、レストランへ連れて行ったり、観光地を案内したりなさっている方々もいらっしゃるようですが、私は留学生の方々に素顔の日本（の家庭）をみていただきたいと思っています。」

3.3 ホームステイ実施後の交流に関するアンケート調査の概要

ホームステイを実施した後、ホストファミリーと受け入れ留学生の間に何らかの交流が存在したかを確認するために、2004年11月中旬から12月末にかけて郵送法により、第1回から第7回ホームステイのホストファミリー経験者48人を対象として、参加留学生95人とのホームステイ実施後の交流に関するアンケート調査を実施し、42人から88人の参加留学生に関する回答を得た。回収率は、ホストファミリーベースで87.5%、参加留学生ベースで92.6%である。

(1)ホストファミリー42家庭の概要

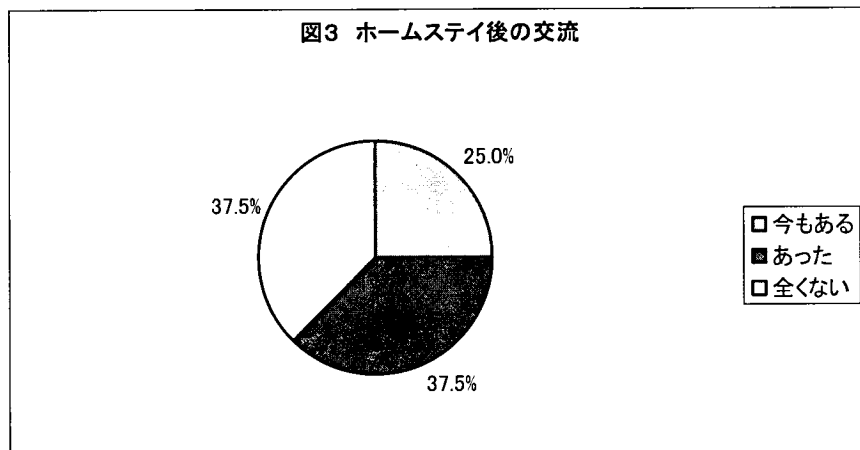
ホストファミリーを所属NGO別にみると、倉敷国際親善協会22、おかやま女性国際交流会4、ハンドインハンド岡山4、岡山ユネスコ協会3、アムネスティ岡山1、留学生ボランティア・WAWA1であり、これにNGOに所属しない登録家庭3及び岡山市国際交流協議会登録家庭4が加わる。

ホストファミリー別の留学生の引受人数をみると、最高が7人で1家庭、次いで6人が2家庭、4人が2家庭、3人が6家庭、2人が12家庭、1人が19家庭である。

(2)ホームステイ終了後、留学生と交流があったか

留学生相談室から郵送した、留学生の「ひと言」付きの礼状を除く、留学生との音信を

含む交流の有無を質問した。参加留学生ベースで、「交流は全くない」33人（37.5%）、
「交流があった」33人（37.5%）、「今でも交流がある」22人（25.0%）であり、ホームステイ終了後にホストファミリーと何らかの接触を持ったことのある留学生は62.5%であることが分かった。「今でも交流がある」留学生をホームステイ参加時期別にみると、第1回1人、第2回6人、第3回なし、第4回4人、第5回4人、第6回3人、第7回4人である。

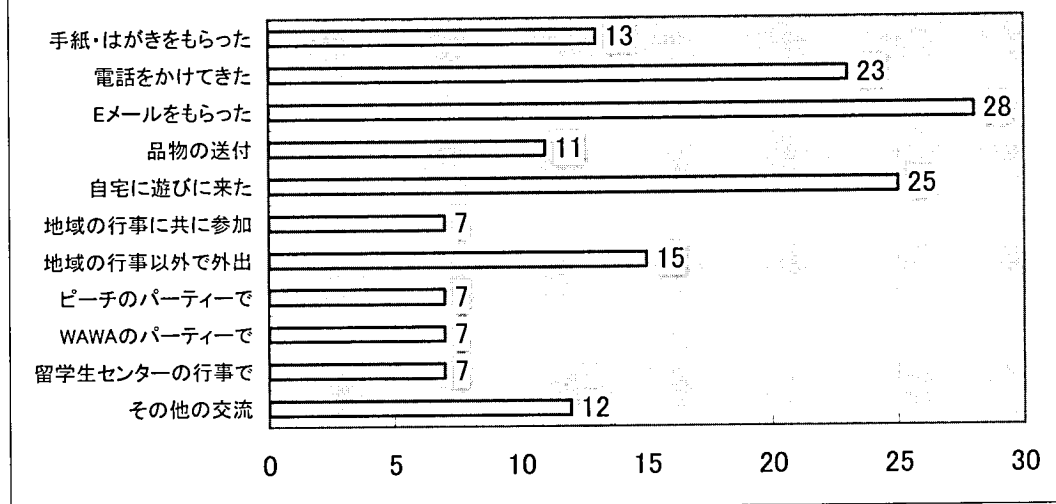


(3)交流の内容

「交流があった」及び「今でも交流がある」と回答のあった55人の留学生との交流の内容に関して質問した。交流の内容は、「その他」を含めて11項目設定し、各々の項目に関して、該当するかどうか、一部は自由記述を交えて回答してもらった。

- 1)手紙・絵はがき・クリスマスカードなどを受け取ったことがある：13人
- 2)電話をかけてきたことがある：23人
- 3)Eメールを受け取ったことがある：28人
- 4)品物（国の民芸品など）を送ってきたことがある：11人
- 5)自宅へ遊びに来たことがある：25人
- 6)地域の行事に参加したことがある：7人
- 7)地域の行事以外でいっしょに出かけたことがある：15人
- 8)留学生支援ネットワーク・ピーチ主催のパーティーで顔を合わせたことがある：7人
- 9)留学生ボランティア・WAWA主催のパーティーで顔を合わせたことがある：7人
- 10)留学生センターの行事で顔を合わせたことがある：7人
- 11)その他の交流：12人

図4 ホームステイ後の交流の内容(N=55)



ホームステイ後に、延べ 64 人の留学生在が手紙・絵はがき、電話、Eメール等の通信手段を用いてホストファミリーに連絡を取っていることが明らかになった。また、帰国後にあるいは在日中に民芸品などを送った留学生在も 11 人存在する。

ホームステイ後にホストファミリーの自宅へ遊びに行ったことのある留学生在は 25 人であるが、もう少し詳しくみると次の通りである。1人で1回再訪した者が6人⁶⁾、友人あるいは親族を伴って1回が8人、1人で2回が2人、友人あるいは夫を伴って2回が4人、1人で1回及び夫を伴って1回が1人、友人を伴って数回が2人、1人で3回及び妻と2回が1人、1人で4～5回及び友人を伴って1回が1人である。友人や妻や夫を伴ってホストファミリーの自宅を訪れた留学生在が17人存在し、また、複数回訪れた者も11人存在することが分かった。

ホームステイ後に地域の行事に参加した留学生在は7人であるが、その内容は、①夏祭り、秋祭り、新築の家の棟上げ式、②餃子パーティー(2人)、③小学校の入学式、④倉敷国際ふれあい広場(妻子同伴)、⑤寄島かき祭り、⑥花火大会3回(妻と友人同伴)である。

地域の行事以外で、ホストファミリーといっしょに出かけたことのある留学生在は15人であるが、外出の内容からホストファミリーと何度も会っている者がいることが分かる。すなわち、①京都(都おどり)、②美観地区、チボリ公園、岡山城、カラオケ、③ひな祭り、美術館、買い物、茶会、花見など、④買い物、⑤買い物と食事、⑥ピアノコンサート、美術館、瀬戸内海クルージング、⑦備前市、熊山町、⑧後楽園、山陽町、⑨瀬戸大橋、与島、⑩鷺羽山、瀬戸大橋、⑪友人宅、チボリ公園、⑫高松市、⑬昼食、⑭食事、喫茶店(何度も)、⑮留学生在の友人宅で食事、英会話クラブにゲスト出演である。

また、留学生支援ネットワーク・ピーチあるいは留学生ボランティア・WAWA 主催のパーティーで顔を合わせたことのある留学生は 14 人である。さらに、延べ 7 人の熱心なホストマザーが日本語研修コースの修了発表会（留学生センターの行事）に足を運び、7 人の留学生と顔を合わせている。

「その他の交流」の自由記述欄には、12 人の留学生との交流内容が記されている。すなわち、①引っ越しの手伝い、料理番組に出演、②七宝焼き体験、テレビの料理番組に出演、③市内の実家へ 2 回来訪、④実家へ来訪、⑤病院へ 2 回付き添い、⑥留学生のアパートへ招待（3 人）、⑦留学生の自宅へ主人と共に招待、⑧留学生のバーベキューに何度か参加、⑨留学生会館で面談、⑩留学生会館のロビーで何回か面談である。

「今でも交流がある」と回答の第 4 回ホームステイ参加留学生との交流内容は多岐に渡っている。すなわち、①手紙・はがき、②電話、③E メールでの連絡あり、④品物の送付あり、⑤自宅への訪問 2 回あり、⑥田舎の夏祭り、⑦秋祭りに参加し、田舎の家にホームビジットした、⑧京都の都おどり見物に出かけた、⑩新築の家の棟上げ式に参加した、⑪よく食事に行ったり喫茶店に行ったりする。その他の自由記述欄には「私のことをおかあさんと呼んでくださり、私も日本のおかあさんの気分で今もおつき合っています。誠実な方です。」と記されている。

また、別のホストマザーの回答には「今年の母の日に 3 人（第 2 回・第 4 回・第 6 回のホームステイ留学生：筆者加注）で来てくれ、手料理を作ってくれたり、プレゼントを私にくれ、うれしかった。」という記述も見られた。

4. 考察

ホームステイ終了直後に行なったアンケート調査結果によると、参加留学生の 80%が「とても面白かった」、18%が「面白かった」と回答しており、否定的な回答はなかった。無回答の 2 人（2%）の自由記述欄にも、“It was marvelous! They were really kind people.”、“The experience was great. I enjoyed a lot.”と記されており、参加留学生全員が面白かったと感じている。

ホームステイ終了直後にホストファミリーに対して実施したアンケート調査によると、回答を寄せられた 90 人の留学生全員に対して「好感がもてた」と評価している。70%の参加留学生が来日時点で日本語未習であり、来日 2、3 か月後にホームステイを体験することになるため、どの程度コミュニケーションができるか心配であったが、96%の留学生とは「できた」あるいは「だいたいできた」との回答であった。留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議で、参加留学生の日本語レベルに関する情報を各加盟団体の代表に伝

えておいたため、ホームステイの当日、英語のできる友人や親族を招く、あるいは英語のできるホストファミリーと合同で受け入れを行なうなどの対応策を採ったホストファミリーが複数存在したことが自由記述欄から明らかである。また、日本語が初級レベルの留学生も英語と日本語を交えて一生懸命コミュニケーションをとる努力をしたことも自由記述欄から窺い知ることができ、留学生のそうした努力が肯定的な評価につながっているものと推察される。

佐々木・水野(1999)は、短期ホームステイのアドバイスとして「買い物から料理まで一緒につくる、趣味を一緒にやる、普段通っているスポーツクラブで一緒に汗を流すなどいろいろ考えられます。要するに、お互いの人間関係の距離を縮めるような活動をするのが大切です。(p.33)」と述べている。ホームステイ中の体験は、もちろんホストファミリーとの食事と団らんが筆頭に挙げられるが、外出したケースも非常に多く、神社仏閣、鷲羽山、瀬戸大橋、倉敷美観地区などの観光地巡りが顕著である。ホストマザーの中にも、観光地を案内するより日本の家庭をじっくり見せたほうが良い、という意見が見受けられた。他方、ホストファーザーの勤務する造船所を見学したり、電力会社に勤務するホストマザーの案内で発電所を見学したり、文化財修復の専門家であるホストファーザーと共に古墳や旧跡を訪れたり、ホストマザーの参加する英会話教室に参加したり、ホストマザーの所属するテニスサークルでテニスを楽しんだり、ホストファミリーの知り合いのぶどう栽培農家を訪れたりするケースもあった。留学生の希望で温泉へ連れて行ったとする記述もみられる。

ホストファミリーに対してホームステイに関するオリエンテーションをきちんと実施すべきであるという意見がある一方、ホームステイのあり方は様々であって良い、画一的な標準型のプログラムがあって、これに沿うようにやれば間違いないという形のオリエンテーションはまずい、という指摘もある⁷⁾。

また、短期ホームステイの受け入れではどのような交流を行なえば良いかという質問に対して、アジア学生文化協会(2002)は、「残念ながら、定番の答えはありません。結果として、お互いの理解が深まり、友情や親密な感情が生じれば、よい交流ができたということに成るでしょう。」、「各人が各人のやり方で工夫をお願いします、としか言いようがありません。」と回答している。

ホームステイはあくまでも受け入れ家庭の日常生活の一端に触れることが主たる目的であるが、日本語力が十分でない留学生が多いため、逆に、家庭内での団らんだけでは間が持たず、実りある体験とはなり得ない可能性もある。「お出かけ」を含む交流の内容は、従来通りホストファミリーの裁量にまかせるしかないと考える。ただし、「お出かけ」が

単なる観光地巡りではなく、できる限りホストファミリーの日常生活を反映したものであってほしいことを留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議で各加盟団体の代表者に伝えたい。

引き受け留学生に関する事前の情報が不十分であるという指摘は、各々の代表者からホストファミリーへの情報伝達をきちんとしてもらうことで解決できよう。各加盟団体の代表者には留学生支援ネットワーク・ピーチ連絡会議の折に参加留学生の基本情報を一覧表にして渡してある。受け入れ留学生に関する非常に詳しい情報を要望するホストファミリーもあるが、プライバシー保護との兼ね合いもあり、事前の通知は現在一覧表にしている情報項目に止めたい。

参加留学生の体調が良くなかった例が複数あることが指摘され、前日に健康チェックをしてほしいとの要望もあったが、ホームステイ前夜に体調を悪くする場合もあり、筆者による前日の健康チェックではこの問題は解決できない。今後は、ホームステイ当日の朝、体調が悪い場合、例えば、待ち合わせ時間の3時間前までにホストファミリーに連絡し、実施を1、2週間延期することをルール化し、体調の悪いままに参加するような状況を回避したい。健康上の理由ではないが、これまでもほとんど毎回、ホストファミリーまたは参加留学生の都合で、事前に実施日を変更するケースが発生している。

また、初期の参加留学生には、ホストファミリーへの土産は母国の絵はがきセット、安価な民芸品程度で十分であり、わざわざデパートで菓子や果物などを買い求めて持参する必要はないと口頭で指導したが、効果はなかった。このため、留学生から質問されない限り、土産には触れないことにした。しかし、複数のホストファミリーから日本製の土産、あるいは母国製であっても高価な土産は不要であるとの記述や、土産は全く不要であるとの意見があるため、次回のホームステイ実施に当たっては「基本的に土産は不要である。持参するとしても母国の絵はがき程度の安価なものに限る。」と文書にしてきちんと指導したい。

ホームステイ終了後は、筆者とピーチ事務局の連名でホストファミリー宛の礼状を送付している。第4回ホームステイまでは、その礼状の下半分に留学生からの「ひと言」を添えるようにしていたが、留学生がなかなか書かないため礼状の発送が大幅に遅れた。そのため第5回以降は、「ひと言」の代わりに日本事情の授業で撮影した留学生の写真を添付することにした。しかし、写真ではなく、留学生からの「ひと言」を希望するホストファミリーが複数あるため、留学生の「ひと言」の復活を早急に検討しなければならない。ここ数年でホストファミリーにインターネットが急速に普及しているため、Eメールを活用した留学生の礼状についても併せて検討したい。

ホームステイ実施後の交流に関するアンケート調査結果から、6割強の55人の留学生がホストファミリーとの「交流があった」あるいは「今でも交流がある」ことが判明した。重複回答で、64人が手紙・はがき、電話、Eメールでホストファミリーに連絡を取ったことがあり、25人が再びホストファミリーの家を訪れたことがある。また、34人がホストファミリーと共に地域の行事に参加したり、行楽地や美術館などを訪れたり、逆に自分のアパートへホストファミリーを招待したりしている。さらに、21人がWAWAやピーチ主催のパーティーあるいは留学生センターの行事でホストファミリーと顔を合わせたことがある。週末型の、1泊2日あるいは日帰りという短いホームステイにもかかわらず、終了後にこうした様々な交流が行なわれていることは喜ばしい限りである。

5. 結び

これまでホームステイ参加対象留学生は日本語研修生、日韓予備教育学生、日研生に限定しているが、将来的には来日半年以内の全留学生を対象を拡大したい。現在、ホストファミリー登録家庭は50ほどあるが、毎回すんなり受け入れが決まるのは10から15家庭までである。従って、参加対象留学生を拡大するためには、登録家庭を少なくとも倍増しなければならない。当面、研究生や大学院生に関しては、要望があればその都度個別に実施せざるを得ない⁸⁾。

この小論では、3種類のアンケート調査結果に基づいて週末型ホームステイの実施状況を再確認した。幸い、参加留学生とホストファミリーの双方とも、各自が体験したホームステイに関する否定的な感想や意見は皆無であった。ホームステイの期間内に大きな事故や深刻なトラブルが発生したこともない。しかし、実施直前の受け入れ留学生情報、参加留学生の健康問題、ホストファミリーへの土産持参の是非、観光地を訪れることの是非、終了後の礼状の形態に関してはホストファミリーの方々から貴重な提言をしていただいた。これらの意見を踏まえ、次回、すなわち、2005年7月に実施予定の第9回ホームステイ以降、留学生支援ネットワーク・ピーチのスタッフの協力を得て、実施方法の改善に努めたいと考えている。

注

- 1) 特集が組まれた号は、1999年2月号、2000年5月号、2001年6月号、2002年12月号、2003年12月号、2004年10月号である。
- 2) 留学生センターへ着任したのは1999年11月であるが、2000年3月末までは経済学部留学生専門教育教官との併任であった。学部の授業及び校務分掌遂行のため、この併

任期間中は留学生センターの業務に専念することができなかった。

- 3) 日本語研修生 74 人は、研究留学生 50 人と教員研修生 24 人に下位分類することができるが、ここでは一括して取り扱う。
- 4) 例外として、2001 年 2 月 25 日に西川アイプラザで開催された岡山県日本語ボランティア・ネットワーク研修会の参加者 4 名が NGO に所属することなく登録している。
- 5) 回答者 94 人のうち、英語で記述した者が 49 人、日本語で記述した者が 45 人である。
- 6) 訪問回数が未記入の 1 人については、1 回としてカウントした。
- 7) 山田・横田・佐川・堀江(1996)の p.8。堀江、山田の両氏がオリエンテーションを必要と考え、横田氏が不要と主張している。
- 8) 研究生の要望に応じて、2004 年 4 月に個別に実施した例がある。

参考文献

- アジア学生文化協会(2002)『短期ホームステイハンドブックー企画・募集から実施・フォローまでー』日本財団図書館(電子図書館) <http://nippon.zaidan.info/index.html>
(2005 年 1 月 25 日閲覧)
- 有川友子(2000)「21 世紀に求められる日本人と留学生との交流のあり方ー‘留学生と地域交流’という視点を超えてー」『留学交流』2000 年 5 月号、pp.2-5.
- 岡益巳(2002)「留学生相談室・年次レポート(2000 年 10 月～2001 年 9 月)」『岡山大学留学生センター紀要』第 9 号、pp.107-122.
- 岡益巳(2003)「留学生相談室・年次レポート(2001 年 10 月～2002 年 9 月)」『岡山大学留学生センター紀要』第 10 号、pp.45-60.
- 岡益巳(2004)「留学生相談室・年次レポート(2002 年 10 月～2003 年 9 月)」『岡山大学留学生センター紀要』第 11 号、pp.79-96.
- 岡益巳(2005)「留学生相談室・年次レポート(2003 年 10 月～2004 年 9 月)」『岡山大学留学生センター紀要』第 12 号、印刷中
- 久保井亮一(2003)「地域に生き世界に伸びる：留学生・日本人学生・地域住民間交流」『留学交流』2003 年 12 月号、pp.6-9.
- 後藤道(2000)「北海道における留学生交流モデル地域推進事業・ホームスイートホームステイ」『留学交流』2000 年 5 月号、pp.8-9.
- 佐々木ひとみ・水野治久(1999)『ホームステイハンドブックーホストファミリーと運営担当者のために』JAFSA ブックレット①、アルク
- 鈴木佑司(2001)「分権化時代の留学生と地域社会」『留学交流』2001 年 6 月号、pp.2-3.

- 中山謙二(2004)「地域社会における留学生交流の在り方」『留学交流』2004年10月号、pp.2-5.
- 古城紀雄(2002)「みずからの国際化を標榜してこそ—外国人留学生をリソースとした交流を考える—」『留学交流』2002年12月号、pp.6-9.
- 山田光義・横田雅弘・佐川政子・堀江学(1996)「座談会・留学生交流と地域社会との関わりを考える」『留学交流』1996年4月号、pp.5-11.
- 横田雅弘(1999)「地域とよい協力関係を結ぶために—大学が地域と交流することの意味を問うことから—」『留学交流』1999年2月号、pp.2-5.